童戯「ポコペン」の方言学的考察

Some dialectal descriptions on *Pokopen*, an infant game

山　田　敏　弘
YAMADA Toshihiro

1．はじめに

児童の遊戯の多くはその遊戯特有のことばを伴う。その中には，じゃんけんのかけ声など，遊び動作の際発せられるかけ声の類のほか，縄跳びやお手玉など，メロディを伴った遊び歌も多くある。

これらの遊びのことばのほとんどは，口伝えで伝えられるものであるため，バリエーションも多い。また，親から子へという伝承ではなく，上級生から下級生へという短い世代間で引き継がれるものもあり，方言語彙以上に時代と共に変容していくこともある。

本稿では，このように方言学的にも興味深い遊びのことばの中で，岐阜県および近隣県で親しまれている遊び「ポコペン[1]」を取り上げ，その分布と変異形について方言学的分析を試みる。

2．考察に関するいくつかの前提

2.1　先行記述に見られるポコペンの基本的な遊び方

そもそもポコペンとはどのような遊びなのであろうか。

岐阜県教育委員会編 (1985:20-21) には次のような手順の説明がある（ふりがなは省略)。

1　ジャンケンで，かりのおにを決めます。
2　おには，じん地に向かって目かくしをします。
3　ほかの人は，「ポコペン　ポコペン　だれがつっついた　ポコペン」と言いながら，順番に

---

[1] ポコペンということばの語源については，『日本国語大辞典』(第二版) によれば，中国語の「不够本・不彀本」に由来し，「元値に足りない」という意味から「いけない」「だめ」「話にならない」など，禁止，拒絶することなどの意で用いるとある。また，幕末動乱期の山形での戦乱の様子を描いた神坂次郎の小説「ぽこぺん戦争」(中央公論社刊『地球上自由人』所収) にも，「不够本」にふりがなつきで「ぽこぺん」とあり，「拒絶する，禁止する，とかの中国語だという」との記述がある (同書文庫版p.292)。

中国語起源の否定的な意味をもつ語であることから，中国人に対する蔑称であるとする説もインターネットなどで散見されるが，十分に信頼の置ける情報として差別の意味が含まれているとの情報は現段階で得られていない。

差別的な意味を含むかについては，中国電子科技大学助手尹永順氏より，過去に日本の兵隊が中国語をそのまま借りて使っていたようであるが，必ずしも蔑称という感じはなく，今の若者も特に「不够本」ということば (現在は「够本」という形で使用) に違和感を持ってないとの証言を得ている。また，岐阜市生涯学習センターでも，高齢の受講者より，「だめ」のような意味で用いた記憶はあるが特に特定の人種に対して差別的に用いたことはないとの証言も得た。

本稿では，一部に蔑称であるとの情報が存在することを十分に考慮に入れつつも，実際にはそのようなニュアンスを含むことが確認できないこと，また，かりに確認できたとしてもそれによって多くの児童が無邪気に行ってきた遊戯の記憶まで封印させられることには異議を唱え，語源意識とは切り離された１つの遊戯で用いられることばを，純粋に方言学的に検証するものである。

おにの背中をつっつきます。

4　おにはふり向いて，いちばん初めにつっついたと思う人の名前を言います。

5　名前が当たっていたら，つっついた人が本当のおにになりますが，はずれていたら，かりのおにが本当のおにになります。

6　おには，決めた場所まで行ってもどってきます。ほかの人は，その間にかくれます。

7　おには，もどってきたらじん地にタッチして，大きな声で「ポコペン」と言ってからかくれた人をさがし始めます。

8　おには，かくれている人を見つけたら，「○○君　ポコペン」と言ってじん地にタッチします。これでつかまえたことになります。

9　全員がつかまったら最初につかまった人がかりのおにになって遊びを続けます。

10　かくれていた人が，おにのいないうちに，じん地に「ポコペン」と言ってタッチした時もおにはそのままで，2からやり直します。

ほかにも，愛知県出身者を中心に昔ながらの遊びについての記憶をまとめた大橋和華編（1994:.20-29）には，愛知県名古屋市および岐阜県可児市在住者各１名による「ポコペン」の記述がまとめてなされている。

名古屋市出身者[2]の「ポコペン」は概略，以下のようである。

①　ジャンケンをし，負けた１名が鬼になる。

②　鬼は壁もしくは電信柱に後ろ向きになり，全員で「先，後，どっち」と鬼に聞く。

③　全員で「ポコペン，ポコペン，誰が突ついた，ポコペン」と歌いながら，１本指で突く。

④　鬼が指定した「先」または「後」に突いた人を鬼が当てたら，鬼は交替。当たらなかったら，鬼が百数える間に他者は隠れる。

⑤　鬼はかくれんぼの要領で「○○ちゃん，ポコペン」と言いながら見つけ，壁や電信柱にタッチする。鬼に見つかる前に，鬼のもたれていた壁あるいは電信柱にタッチすれば鬼にならなくて済む。

⑥　全員が見つかったら，「先」または「後」の人が鬼になって②からを繰り返す。

岐阜県可児市出身者の記述もおおよそ同じであるが，鬼に全員が見つかる前に，鬼のもたれていた壁あるいは電信柱に「ポコペン，切った」と言って誰かがタッチすれば，全員が解放され，同じ鬼で②からを繰り返すという手順となっている。

この２例からも分かるように，ポコペンのルールにはいくつかの変異形が見られる。子どもの遊びは，成文化された決められたルールの下に行われているわけではない。そのため，このような違いが生じるのであろうが，ポコペンとて例外ではない。

2.2　先行記述に採録された鬼替え歌

前節3および②では仮の鬼を交替させるための歌が歌われており，これがポコペンという遊びのひとつの大きな特徴となっている。本稿ではこの歌を鬼替え歌と呼び考察の対象とする。

管見の限りもっとも古い「ぽこぺん」ということばが見られる文献としては，木曽教育部会編（1936）がある。そこには次のような記述がある。

---

[2] 年齢は記されていないが，著者が昭和53年から教えた大学生からの証言だとすれば，おおよそ昭和30年代後半以降の生まれのものと考えてよいであろう。

ぽこぺん〳〵つゝきませう
つつつきますか　ちよんだあれ

この一連の句は童言葉の遊戯語として位置づけられており，「鬼さんこちら」で始まるかくれんぼの際の歌などと並んで出てくるものである。このことから，遊び歌の一種であることは推察されるが，遊びの内容がわかる記述はされておらず，２.１節で見たポコペンという遊びの鬼替え歌に該当するか否かは不明である。

このほか，岐阜県教育委員会編 (1985) においては，昭和58年度，59年度の「民謡緊急調査」の結果として，ポコペンに関する記述が３箇所に見られる（恵那郡坂下町(現 中津川市)には歌の記述はない)。

ポコペン　ポコペン　つつきましょ
赤豆　白豆　きったん坊主
うしろにおるもの　だあれ
（同書 p.186　羽島郡川島町（現 各務原市川島）の明治41年生まれ女性）

ポコペン　ポコペン
つつきましょ
だあれ　（同書 p.186　恵那市長島町の昭和2年生まれ女性）

大橋(1994:26-27)に記載されている歌は，上記のものとかなり異なる。

- ポコペン，ポコペン，誰れが突ついたポコペン。
- ポコペン，ポコペン，今誰れが突ついたかポーコペンペンペン。
- ポコペン，ポコペン，誰れが突ついたポコペン，一番最後（最初）は誰れ。
- ポコペン，ポコペン，誰れが突ついたポコペン最後誰れだ。
- ポコペン，ポコペン，誰れが最初に突ついたポコペン。

大橋 (1994) に記述された鬼替え歌は，岐阜県教育委員会編 (1985) と「最初」あるいは「最後」を指定する点で大きく異なっている。これは回答者の出身地に関係があるようである。大橋 (1985) で回答している学生は，おおよそ愛知県出身者で，東限は豊明市である。岐阜県出身者は可児市出身の２名であり，三重県四日市市出身者１名がここに加わる。

鬼替え歌がないパターンもある。大橋 (1994:26-27) では広島県の学生１名が鬼替え歌がない方法を回答している。ルール的にかくれんぼと区別ができる要素があるか否かには触れられておらず，ポコペンの範疇に含められるかは判断が難しい。

このように，鬼替え歌にも多様な変異形が存在する。鬼替え歌のことばは，「ポコペン」ということばを含む点では共通しているが，「今」「最初に」「一番最後」などの順番を表す語を含むか，「つついた」に「か」をつけるか否か，最後に「ポコペン」ということばで終わるか否か，など，いくつかの類型に分けられる。

２.３　本稿の考察範囲と方法

以上の先行記述をふまえ，本稿では次の記述を行う。

まず，「ポコペン」という遊び自体の存在の有無について，全国，岐阜・愛知両県における共時的分布と，岐阜市における通時的分布を示す。

続いて，鬼替え歌の有無およびその内容についての考察を行う。内容については，「最初」「最後」など順番を指定するか否かについてと，「つつく」に相当することばについて考察を行い，ポコペンの盛衰を探るひとつのヒントを得る。また，少数ながら集められた歌のメロディから，アクセントと

の関連についても少し触れておく。

方法については，いずれの考察も独自のアンケートの結果をふまえて行う。今回，以下の対象からデータが得られた。

- 2004年度岐阜大学教養教育「岐阜県方言のしくみを学ぶ」受講者181名（予備調査）
- 2005年度岐阜大学教養教育「岐阜県方言のしくみを学ぶ」受講者152名（社会人学生7名を含む。インターネット経由で受講している他大学学生については含まない。）
- 2005年度岐阜大学教育学部「小学校教科国語」受講者153名
- 2005年8月8日岐阜市生涯学習センター「調べてみよっけ　岐阜のことば」受講者およびセンター関係者88名
- 2005年8月25日瑞穂市瑞穂大学寿学部講義「まっとみんなで使おっけ　岐阜のことば」受講者のうち瑞穂市出身者147名

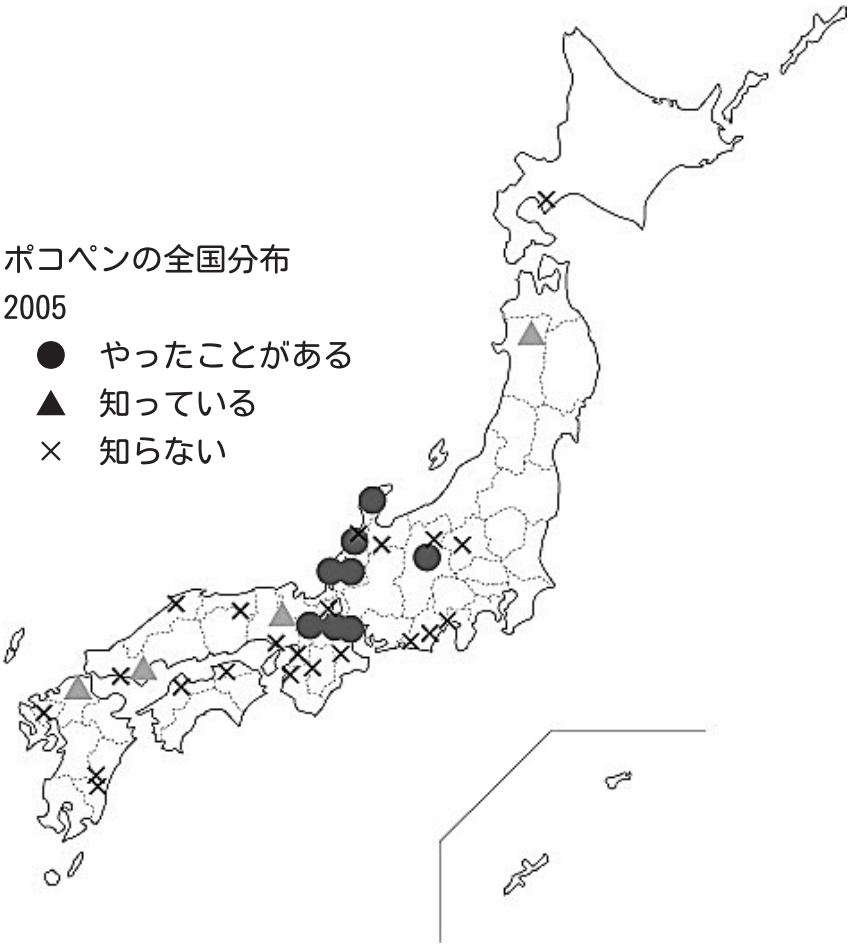
アンケートの内容は，2004年度の予備調査においては遊びの有無のみを聞き，2005年度の本調査ではおおよそ次の通りの質問を行った。

「ぽこぺん」という遊びについて聞きます。
①　やったことはありますか？
　1.やったことがある　2.やったことはないが知っている　3.知らない
②　最初に，鬼に向かって「♪ポコペン，ポコペン〜」と歌を歌いましたか？
　1.　歌った　　2.　歌わなかった　　3.歌ったときと歌わなかったときとある
③　②の歌を（おぼえていたら）書いてください。

３．遊びの分布

３.１　全国分布

今回，２.３節に示した岐阜大学でのアンケート調査から社会人学生を除き，大学生というほぼ同世代から得られた結果を地図上に示すと次のようになる（岐阜県および愛知県については，数が多いため，別に地図２に示す）。



地図１　全国におけるポコペンの分布

すべての都道府県からデータを集めることはできなかったが，現在の大学生が若いときに遊んだであろうポコペンは，おおよそ中部地方および滋賀県と三重県にのみ分布していることが地図１から見て取れる[3]。

全国分布を補完する情報として，インターネットで検索すると，ポコペンという遊び自体の存在は，北海道，青森，岩手，東京，神奈川，北陸，名古屋，京都，岡山，四国，島根などに確認できる(http://sports7.2ch.net/test/read.cgi/rsports/ 1091623951（2005年6月現在))。インターネットの掲示板への書き込みは，広範囲のデータが集まるという利点もあるが，発信者の年齢や出身地を含め

[3]　今回のアンケート調査には不備な点が２点あったことを認めなければならない。

１点は，教育実習を経験した学生の中に「実習先の学校で児童と一緒に遊んだことから知った」というものが少数いた点である。教養教育科目は主として１年生が，教科国語は２年生が履修対象となっており，このような過年度履修生の存在は念頭に置いていなかったため生じた問題であったが，地元の学校で経験してきたことによる知識か，岐阜大学に入学してから教育実習によって得た知識かは判別付かないため，本稿ではその点の不備を認めつつも，出身地によって分布を位置づけることとした。

もう１点は，「ポコペンを知っている」という学生のうち，少なくとも秋田県出身者を含む何名かは，秋本治著のマンガ『こちら葛飾区亀有公園前派出所』から，ポコペンの存在を知ったことがわかった点である(後述)。このほかにも，カンケリのことを「ポコペン」と呼ぶという学生が2004年調査においては数名いたことも付記しておく。

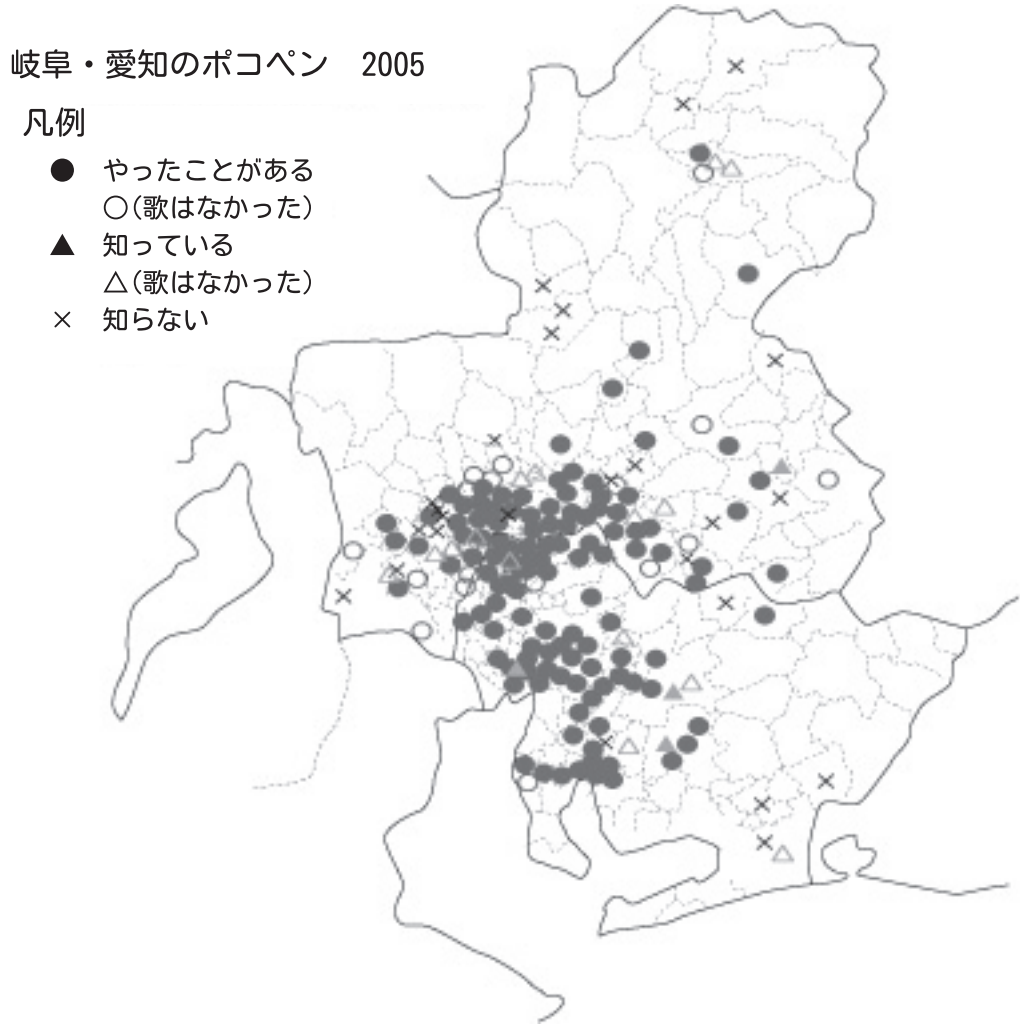
匿名性に問題がある。ポコペンで遊んだことがあるという書き込みのすべてが虚偽ではないとすれば，(書き込みを行っている人の平均年齢は少なくとも大学生より上であろうが，)地図１以外の地域でも遊ばれていた可能性はかなり高い。

一方で遊びの形式が同じであるかにも注意する必要がある。新美健太（2005）は，群馬，埼玉，東京で歌のないカンケリ型の存在を報告している。東京については，秋本治著のマンガ『こちら葛飾区亀有公園前派出所』コミックス102巻所収の「カンケリ名人両津!!の巻」において，カンケリの発見周知の際に「ポコペン」ということが記されている（p.88ほか）ように，カンケリ型の遊びが同名で呼ばれていた可能性が高い。

一方で，概して「存在」は証明できても「非存在」は証明しにくいのも事実である。笹間良彦(2005)，遠藤ケイ（2001)，阪本卓男（2002)，島田陽子（1986）は，それぞれ東京，新潟，山陰，関西における遊びを中心に童戯を広く拾っているが，ポコペンの記述は載せられていない。不記載がすなわち非存在ではなかろうが，これらの地方であまり遊ばれていなかったという傍証とはなろう。

３.２　岐阜県及び愛知県の分布

それでは，この地図１には示さなかった岐阜県と愛知県の分布はどうであろうか。こんどはもう少し細かく，市町村区域ごとに分布を示しながら見ていくこととする。



地図２　岐阜県および愛知県におけるポコペンの分布

岐阜県飛騨地方および愛知県三河地方のデータが相対的に少ないため確実なことは言えないが，証言も合わせて考えても，岐阜県飛騨地方および愛知県三河地方東部においては分布が極めて限られているようである。また，郡上市では，北部での存在も確認できなかった一方，旧和良村および旧八幡町小那比地区においての存在が確認された。

3.3　岐阜市を中心とした通時的分布の変化

子どもの遊びは不変のものではない。時と共に遊び自体が生じたり無くなったり，また無くならないまでも内容が変化することは容易に予想される。

今回，岐阜市を中心とした大正8年生まれから平成6年生まれまでの88名に対して，前述と同様のアンケートを行い，結果を得ることができた。その結果を以下に示す。

●　ポコペンという遊びをやったことがある。歌も知っている。
○　ポコペンという遊びをやったことがあるが，歌はよく覚えていない，もしくはなかった。
▲　ポコペンという遊びをやったことはないが知っている。歌も知っている。
△　ポコペンという遊びをやったことはないが知っている。歌はよく覚えていない，もしくはなかった。
×　遊びも歌も知らない。

出身地 生年	岐阜市	岐阜市外県内	県　外
～昭10	●●●○○○○○○○○ ○△△△×	●△×	○(大阪)，△(熊本)，△(京都)，×(東京)
昭11～昭20	●●●○○○	●●○○△△	△△(愛知)
昭21～昭30	●●●●●●○△	○○	●●○▲(愛知)，○徳島，×(東京)，×(岡山)
昭31～昭40	●●●●○○▲	●●○	
昭41～昭50	●●		××(神奈川)，×鹿児島
昭51～	●●●●●●○○○○	●●●●●×	○(愛知)

表１　岐阜市におけるポコペンの世代別分布

岐阜市内でも地域によって差があることは十分に予想されるところではあるが，今回は市内での地域差を表せるほど詳細なデータは得られなかったため，市域におけるおおよその状況を述べるにとどめたい。

今回得られた結果では，岐阜市内では昭和2年生まれの人に，すでにポコペンは遊びとして遊ばれている。しかし，昭和一桁生まれの人までは，歌をよく覚えていないとする回答が圧倒的に多かった。現在とほぼ同じ鬼替え歌が歌われることが確認できたもっとも早く生まれた人は，昭和7年生まれの人であった。また，アンケートの際に，一度自由回答をしてもらった上で，こんな歌ですと筆者の知っている歌を歌ってみたので，よく覚えていないとする○ならびに△の人は，実際には歌わなかったか，歌がまったく異なっていた可能性も否定できない。

同時に「ポコペン」という遊びの名だけを知っているということも考えにくい。遊びの名はその遊びに含まれる要素から名付けられるのが通常の過程であろう。であれば，当然，ポコペンと名付けられる何らかの要素を，遊びポコペンは含んでいなければならない。今回，岐阜市の調査では，歌がな

いにもかかわらずポコペンという遊びの名前がついた理由はわからなかった。今後の課題としたい。

本稿脱稿直前に岐阜市西側に隣接する瑞穂市でも同様の調査を行うことができた。結果は次のようである（瑞穂市以外の出身者については人数的なバランスから省略する)。

生　年			
大正　2　年	×	昭和　2　年	○△
3　年	×	3　年	○○○○○▲▲△△××××××
4　年	××	4　年	○△△××
5　年		5　年	●○△△×××
6　年		6　年	●●○○△△△××××
7　年	×	7　年	●●●●●△△△××××
8　年	▲×	8　年	●○○○○△△△×
9　年	△×××	9　年	○○○△××××
10　年	△▲××	10　年	
11　年	△△△×	11　年	●●●○▲××××
12　年	××	12　年	●●△△××
13　年	△△△×	13　年	●○△×××
14　年	△△△××××××	14　年	●○○▲△△×
15　年	●●●○△△△××××××××	15　年	
		16　年	×
		17　年	
		18　年	●
		19　年	●

表２　瑞穂市におけるポコペンの世代別分布

瑞穂市については，岐阜市よりも相対的に高齢の方が多いせいか，×が多くなっている。その中でも，大正15年の３名にもっとも早く歌を伴った遊びとしての記憶があり，昭和一桁後半から遊んだ人が多く見られる。

『日本国語大辞典』(第二版)によれば，「ポコペン」ということばの初出は，1919年となっている(注１参照)。この語源からどのように歌に取り入れられたか，また遊びがどこでどのように考案されたかは，今回の調べた中ではつきとめられなかったが，1930年代には，すでに岐阜市を含む近郊地域で広く遊びとしてこのことばが取り入れられていたであろうことは確かなようである。

３.４　まとめ

ポコペンという遊びの分布については，全国的にも中部地方に多く分布し，また，岐阜県美濃地方と愛知県尾張地方で現在の大学生世代においても隆盛を極めていることが確認できた。

世代的な分布については，岐阜市および周辺地域において，昭和初期より類した遊びがありポコペンと呼ばれていたことが観察された。ただし，歌がなかったとの報告もあり，ポコペンという名前が付けられた理由についてはさらに調査する必要がある。

次節においては，鬼替え歌の有無についてもう少し考察を加え，さらにこの地域での歌の内容について探っていく。

４．鬼替え歌

ポコペンには仮鬼を決めた後，鬼交替のチャンスが設けられている。鬼替え歌の内容については，

岐阜県小中学校教育研究会小学校体育部会編 (1984:20) によると，「ポコペン ポコペン だれが つっついた ポコペン」とあり，大橋 (1994) および林友男 (1991:266-267) にも，第一に同様の遊び歌が載せられている。

しかし，大橋 (1994:25) にあるように，実際には歌のバリエーションも多く，また，林 (1991：267) に採譜されたメロディもさまざまである。

本節においては，この鬼替え歌のバリエーションについて，少し考察を加える。

4.1　鬼替え歌の有無

地図 2 に示したように，ポコペンという遊び自体知っているあるいは遊んだことがあるという中にも，歌の有無の違いが見られる（地図中では歌がないものは白抜きの○あるいは△で表示）。

名古屋市内では，ポコペン経験者で歌がないという報告は今回得られなかった。名古屋に南接する東海市や半田市などの地域でも歌が用いられることが通例であるようである。

一方，歌が用いられていない証言が複数存在するのは，岐阜市内や岐阜県西南部地域，ならびに一宮市など尾張地方北部である。岐阜市内および尾張地方北部のようなやや人口の集中している地域では，いずれも，歌を用いるという証言が多数を占める中，歌を用いないという証言も複数得られている点に注意が必要である。

美濃加茂市の例では，同じ小学校を同時期に卒業したにもかかわらず，１人は歌を歌ったという証言をし，１人は歌を歌わなかったとの証言をしている。同じ時期，同じ小学校内でお遊び方がクラスあるいは遊び仲間によって違っていた可能性もある。

また，今回の調査からは外れるが，岐阜市北部の学校では，親の世代で歌が存在していたにもかかわらず，子ども世代では歌を用いないということが証言されている。個々の事例については，まだ詳しく調べる必要があるが，多くの箇所で歌が歌われなくなり，それにともなって遊び歌が変容してきた可能性もある。

4.2　何番目につついた人を言い当てるかを歌に含めるか

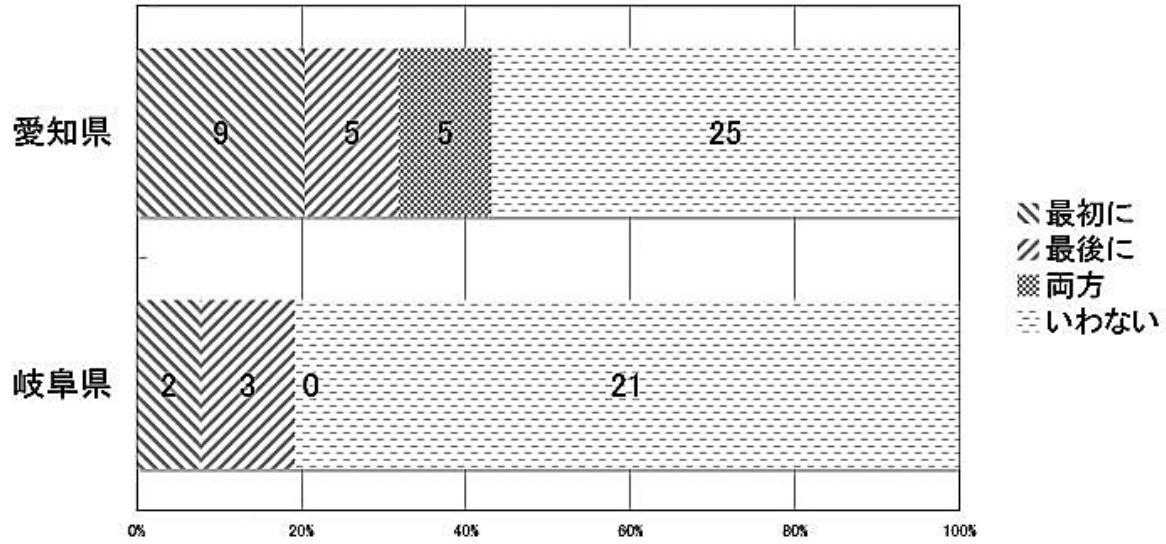
ポコペンは，遊びの最初に決められた鬼が，鬼以外の人に背中をつつかれて，それが誰か言い当てられれば鬼が交替するという要素をもつのが，この地方での優勢な遊び方である。その背中をつつくという儀式には，代表者１人だけがつつく場合と，任意の参加者がつつき，その順序によって当てる場合との 2 種類が存在する。このようなつつき方と歌詞に含まれる順番指定という要素とはどのような関係があるのであろうか。

林 (1991:266) では，４種類のポコペン歌が採録されているが，そのうち，笠松町，和良村，多治見市の 3 例は，つついた人の順番を設定することばが含まれていない。順番指定の要素が入っていない場合，代表者１人だけがつつくとも考えられるが，任意の参加者がつつく場合でも，最初からどの順番でつついた人を当てるか決まっていれば，指定する要素を含む必要はない。

岐阜県教育委員会編 (1985) では後者の方法であり，筆者自身の記憶でも同様である。そのため，最初につつき始めるまでは，目配せでやりとりがあり，わざと自分とは違う方向からつついてみて，他者の名前を言わせようと工夫をしたものである。また，最初の誰かがつついてからは，誰彼となく手荒につつきまくった（時には殴った）ことも記憶に残っている。

林 (1991:266) の 4 例のうち，「先に」などの要素が含まれているのは，南濃町の１例のみである。ここでは，「ポコペンポコペン 誰が先につついたか ポコペン」と，「先に」という歌詞が挿入されている。この場合にそうであったかは確かめようもないが，「先に」「後に」という要素が歌中に挿入されるということは，その要素を替える可能性があるということである。実際，アンケート結果からは「先に」と「後に」をどちらか選択するという可能性も何人かから示唆されていた。

この先後指定の要素に関しては，岐阜県と愛知県で大きな違いが見られる。2005年教養教育のデータのみを例に比較すると次のようになる。



グラフ１　ポコペンで「最初に」「最後に」などを歌の中で指定するか

人数的には異なるが，おおよそ愛知県の方が「最初に」や「最後に」などによって，つついた人間を当てる順を指定するというバリエーションが加わっている割合が多いことが，グラフ１から見て取れる。岐阜県内では，「最初に」が笠松町，多治見市で，また「最後に」が岐阜市，垂井町，瑞浪市において確認されたが，相対的に見て少数であった。

「最初」あるいは「最後」といつも決まっているのではなく，いずれもありうる「両方」という１割程度から得られている点も，愛知県での遊び方の特徴である。半田市の回答者からは，「２番目」「３番目」など任意の順番を指定するパターンも報告された。

このように愛知県のほうが全般的に遊びに工夫が見られる。逆に「言わない」ということは，先にも述べたように，遊びのバリエーションとしてはそれだけ固定的であることを示している。工夫はそれだけ少ない。

通常，遊びというものは，その遊びに加わる人が多ければ，既存の遊び方に飽きたらず，新たな要素を入れることによって複雑化していくものである。今回のデータからは，愛知県の方が岐阜県よりもルールが複雑化していることからも，あくまで県内での地域差を考えないレベルでの考え方であるが，愛知県でのポコペンの方が勢力がある，すなわち多くの子どもたちによって遊ばれており，それによって遊びにも工夫が施されていることが推測される。

４.３　「つっついた」と「ほっついた」

今回，集められたポコペンの歌には，２節で示されているような「つ(っ)ついた」だけでなく，「ほっついた」という動詞が用いられている例も何件か確認された。岐阜大学教養教育の大学生調査からも「ほっつく」を用いた鬼替え歌が何例か採取された。当該学生の出身小学校を列挙する。

垂井町：府中（ふちゅう）小学校，垂井東小学校
大垣市：中川小学校，南小学校
糸貫町：席田（むしろだ）小学校
北方町：北方小学校，北方西小学校

岐阜市：西郷小学校，黒野小学校，三里（みさと）小学校，鏡島（かがしま）小学校，鷺山（さぎやま）小学校，華陽小学校，藍川小学校

美濃加茂市：古井（こび）小学校

これらの小学校は，美濃加茂市の一例を除けば，いずれも西濃から岐阜市までつながった北部山沿いの地域に分布しており，「ほっつく」はこのあたりの方言として，「つつく」の代わりに用いられていると考えて妥当であろう。

時間的には前後に広がるが，表１に示した岐阜市生涯学習センターにおけるアンケートの結果からも，岐阜市ではほぼ「ほっつく」が用いられており，各務原，笠松，郡上，本巣，北方でも「ほっつく」が用いられていた。一方，中津川，美濃加茂と山県については「つっつく」であり，西に「ほっつく」，東に「つっつく」というおおよその分布が確認された。

「つっついた」は「つつく」から来ており，その通り「突く」行為を表す。一方，「ほっつく」は，『日本国語大辞典』(第二版)に「ほつく」として立項され，現代語の「ほっつきあるく」に見られるような「うろつく」などの訳が当てられている語である。方言での用例としては，「くちばしでつつく。ついばむ」という意味での分布が全国的にもっとも広く，岐阜県不破郡での用例の存在も記されている。今回，ポコペンで用いられている「ほっつく」が，この「くちばしで」と限定がついた「つつく」と同義であるのか決定する確たる証拠は得られないが，おそらくその可能性は高いであろう。

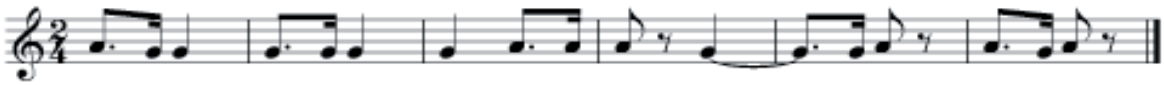
しかしながら，「ほっつく」は岐阜県内でも広く使われることばではない。『日本国語大辞典』にも用例として拾われている『岐阜縣方言集成　全』の不破郡の記述には見られるが，手元にある西濃および中濃・岐阜地区の方言集にはいずれも項目が見られなかった。もちろん，手元にある方言集にないからといって，方言として「ほっつく」という語の非存在を主張することにはいささかの危険も伴うが，筆者自身の母語としての記憶の中にも「ほっつく」を単独で用いるのは，ポコペンの遊び歌以外に思い当たらない。例えば背中をつついた人に「つっつかんといて」とは言っても「ほっつかんといて」とは言わない。遊びの中でだけ「ほっつかれる」のである。

記述からもまた分布からも古くから存在していた語と考えて間違いないであろうこの語が，なぜ方言集等に拾われることばとならなかったのかは疑問であるが，遊び歌の中に閉じこめられてきた化石のような存在としては興味深い語であることは間違いないであろう。

４.４　メロディ

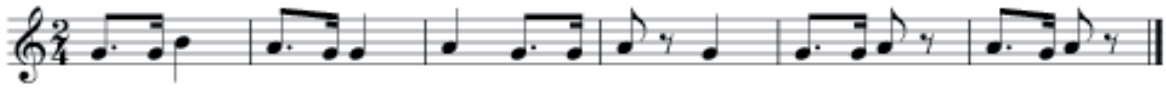
歌のメロディについては，いささか方言学的な考察からは外れるので，アクセントについて簡単に述べるにとどめる。

筆者自身の記憶にあるメロディを採譜すると次のようになる。



林 (1991:267) に採録されているものも，テンポに違いはあるが出だしはおおよそ同じである。これは，ポコペンのもつ頭高アクセントと一致する。

いっぽう西濃出身者からは次のような全く異なる出だしをもつメロディも採取された。



西濃においても「ポコペン」は頭高である。アクセントとメロディとの不一致については未解決のまま残った。

４.５　まとめ

まだまだ調査としても不十分である点は否定できないが，今回集められた資料で言える範囲のことをまとめておく。

まず，鬼替え歌に含まれる順番指定要素の分布から，岐阜県よりも愛知県（尾張地方）での遊びの工夫が指摘される。まだまだ多くの児童によって遊ばれ，活況を呈している様相が明らかになったものと考えられる。

また，西濃から中濃にかけて，いまではほとんど単独では使われない「ほっつく」という語の歌中での生き残りが確認できた。今ではほとんど「鋲」という語は使われないのに「画鋲」と共通語では言う（岐阜市では伝統的に「画針（がばり）」）。また昔話や民謡などに，意味も分からないまま残っていることばもある。このような化石として残ってきた昔のことばが，ポコペンという遊びにも含まれている。

５．おわりに

子どもの遊び歌は，親から与えられたものではない。友だちどうしでの遊びの中で伝承されていくものである。今回，ポコペンの鬼替え歌の調査を通じて，昭和初期前後という時代に生まれたポコペンという遊びは，上級生から下級生へと何代にもわたって，多くの子どもたちに受け継がれ愛されてきたことが垣間見られた。

一方，遊びは変容するものである。岐阜県では，すでに鬼替え歌がなくなったところもあり，遊びの形態としては簡略化されつつある反面，愛知県では先か後かを組み入れるという改良もされてきた。工夫が行われ，それが他地域に発信されていく。これはまさに方言の出来方・伝播の仕方と同じである。方言は，概して，文化水準の高いところから低いところへの一方通行的な伝播をすると言われている。今回のポコペンのルールについては，愛知県から岐阜県への広がりも一部に見られ，これはやはり文化的な影響力の強さによるものであろうか。しかし，子供どうしの遊びのことばが，小学校という同一生活圏を越えてどのように広まっていくのか，まだまだ不明な点も多い。

ジャンケンの組み分け，「天の神様の言うとおり」で始まる選択歌，「いーけないんだいけないんだ先生に言ってやろ」のような非難歌など，バリエーションの多い子どもの遊び歌を調べることで，ことばのひとつの伝播方式が明らかになるかもしれない。

【謝辞】

岐阜市生涯学習センターならびに瑞穂市瑞穂大学関係各位には，アンケート実施に関してお世話になりました。

【参考文献】

遠藤ケイ (2001)『懐かしの昭和児童遊戯集　こども遊び大全　新版』新宿書房（元版は1991年発行）
大橋和華 (1994)『大学生からの伝言―私はこうして遊んだ（伝承遊び編）―』近代文藝社
木曽教育部会編 (1936)『木曽民謡集』（1985年　郷土出版社より復刻刊行）
岐阜県教育委員会編 (1985)『岐阜県の民謡　昭和五十八年・五十九年度民謡緊急調査報告書』
岐阜県小中学校教育研究会小学校体育部会編 (1984)『岐阜県につたわるこどもの遊び』光文書院
阪本卓男 (2002)『昔遊び図鑑』東京書籍
笹間良彦 (2005)『日本こどものあそび大図鑑』遊子館
島田陽子 (1986)『大阪ことばあそびうた』編集工房ノア
瀬戸重次郎 (1934) 『岐阜縣方言集成　全』大衆書房
新美健太 (2005)「ポコペン」（2005年度前期「岐阜県方言のしくみを学ぶ」レポート）
林友男 (1991)『岐阜県のわらべうたいまむかし』（出版社名なし）
山田敏弘 (2004)『みんなで使おっけ！　岐阜のことば』まつお出版